2023年4月16日佐土原キリスト教会 礼拝説教

聖書箇所：マルコ福音書16章9～20節

説教題：信仰への招き

カナダにいる時のこと、ある問題で私は混乱していました。そんな時、珍しい方から電話を頂きました。その方は、開口一番こう言われました。「先生の一番好きな御言葉は何ですか」。突然の質問に一瞬詰まったのですが、思い浮かんだのは「イザヤ書」の言葉でした。「恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る」(イザヤ41:11)。「この言葉が好きです」と申し上げました。そうしたら「なぜ好きなのですか」と言われました。それで私は「この御言葉によって励まされて来ました」とお話ししました。しかし電話を切った時に「まるで神様が『わたしが共にいる』ということを教えるために掛けて下さった電話のようだったな」と思ったのです。

私達には、いつも何らかの悩み―(問題)―があるのではないでしょうか。しかし、そこを乗り越えて行く力は、「『復活のイエス様が私と共に生きていて下さる。イエス様が働いて下さる』ということを信じることに懸かっている」と言えるのではないでしょうか。そのように信じるためには―(もちろんそれは「聖霊の働き」に拠るわけですが、しかし私達の側の問題としては)―「主を経験し、信仰が強められることを願」そのことが大切ではないかと思います。今日も、「内容」と「適用」とお話しします。

1. 内容～主の復活を信じなかった弟子達

復活のイエス様に初めて会っているのは、マグラダのマリア(達)です。しかし、マリヤがそのことを弟子達に伝えたのに、11 節「ところが、彼らは、イエスが生きておられ、お姿を見た、と聞いても…信じようとはしなかった」(11)。「ルカ福音書」では、イエスの十字架に絶望して故郷のエマオに帰り行く2人の弟子が、その途上でイエス様に出会っています。イエスに出会った彼らは、急いでエルサレムの弟子達の隠れ家に取って返し「イエス様に出会った」と言います。しかしこの13節「彼らはふたりの話も信じなかった」(13)。しかし、そこへイエス様が現れなさったのです。

何度かお話ししていますが、私は「Heaven Must Wait－(天国は待っているに違いない)」という映画を見たことがあります。イギリスの田舎の村にある使われなくなった教会に1人の不思議な少年が住んでいました。その村に1つの事件が起こるのですが、その少年の存在が村の人々の心に働いて、その事件が無事に解決します。村の皆も喜んで、村全体が幸せな気分に包まれます。ところが、皆が喜んでお祝いの準備をしている時に、1人の嫌なお爺さんとその孫が教会の地下にもぐって財宝探しをしていました。ところが地盤が緩んで、孫が生き埋めになってしまいます。そこに、教会に住んでいる少年が駆けつけて、土砂の合間をぬって向こう側にもぐり込み、孫をこちら側に押し出して助けます。しかしその時に再び土砂が崩れて、今度はその少年が生き埋めになってしまいます。大人達が駆けつけて、必死になって彼を助け出しますが、すでに彼の呼吸は止まっています。救急隊員が来て人口呼吸を繰り返しても、結局、息を吹き返さずに、彼は遺体を入れる黒いビニールのバッグの中に入れられてしまうのです。彼は、村人にとって大きな存在でした。村人は「息を吹き返すのではないか」とバッグを見つめ続けます。でも何も起こりません。村中が喜んでいたのに、彼の死は、村の人々に何とも言えない悲しみを与えます。村中が意気消沈しています。映画を見ていた私も本当に悲しい、「これで終わるのだろうか」という感じでした。しかしその少年は、実は天使だったのです。彼は死んで、天使長に会います。天使長が聞きます。「このまま天使に戻りますか。それとも人間として生き返りますか」。少年は答えます。「彼らが僕を必要としているから、僕は彼らの所に帰ります」。そう言って天使長と別れた瞬間、黒いビニールに覆われていた彼の体は、黒いカバーを突き破って生き返るのです。それを見た村人の喜びがどれ程大きかったか、見ている私も感動と興奮に包まれました。私は復活のイエス様に出会った時の弟子達の衝撃、その一端に触れた感じがしました。14 節はさらっと書いてありますが、弟子達にはきっと大きな衝撃だったと思います。

しかし、なぜ彼らは―(イエス様が現れる前)―マグダラのマリヤの言うことも、2 人の弟子の言うことも信じなかったのでしょう。それは、絶望が彼らの心を閉ざしていたからです。「死の力―(死の現実)」の方が「イエスのどんな約束の言葉」よりも強いように感じられたからです。今もそうです。全ての人を捕らえて、抑え付けているのは「諦めの力」です。彼らは絶望に縛られていました。「諦めの力」に捕われている時、きっと私達は「主」を認めることが出来ないのです。

しかし、彼らの前に現れたイエスは、「あなた方の不信仰は分かる」とは言われなかったのです。14 節を言い換えると、「あなた方の不信仰は間違っている、信じる者になれ」と言われたのです。イエス様を見捨てて逃げた弟子達でした。彼らは弱かった。しかしイエスは、彼らの弱さを良く分かった上で、でも「弱いから不信仰でも良い」とは言われなかった。尚も彼らに期待して「信仰に生きるように」と招かれたのです。

しかし平行個所である「マタイ 28 章」には「11 人の弟子たちはガリラヤに行き、イエスが指示しておかれた山に登った。そして、イエスに会い、ひれ伏した。しかし、疑う者もいた」(マタイ 28:11)と書いてあるのです。「復活のイエス様に会い、イエス様を見たのに、(尚も)疑う者がいた」と言うのです。彼は何を疑ったのでしょうか。恐らく「イエス様が甦ったと言っても、我々といつまでもいて下さるわけではないだろう。天に帰ってしまわれる。後はもう仕方がない」、そういう意味での「疑い」だったのではないでしょうか。つまり「復活のイエスの力に生かされて生きる現実がある、見えないイエス様と共に生きて行ける現実が始まる」、そういうことを疑ったのではないかと思います。それは、丁度私達が「イエス様を信じると言いながら、『今日、イエス様が私と共に生きておられる、今もイエス様が働いて下さる』、それを疑う」、それと同じだと思うのです。私達も、神が今、私に働いて下さることを信じなければならないと思います。

しかし「見ても疑う」ということは、「『見れば信じられる』というものでもない」ということではないでしょうか。言い換えれば、「生ける主を(神を)信じる」ということは、もっと深い関わり、「本当に神に頼って生きる、神の言葉を握って生きる」、そういった関わりの中で生まれて来るものではないかと思うのです。だから、疑いの中にいる彼らにイエス様は、「全世界に行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい」(15)と宣教命令を与えられるのです。イエス様の戒めに生きてみる、その深い関わりに生きることを促されたのです。イエスはさらに言われます。「信じてバプテスマを受ける者は、救われます。しかし、信じない者は罪に定められます。信じる人々には次のようなしるしが伴います…病人に手を置けが病人はいやされます」(16～18)。「信じる者には…しるしが伴う」と語られます。そして 20 節に「そこで、彼らは出て行って、至る所で福音を宣べ伝えた。主は彼らとともに働き、みことばに伴うしるしをもって、みことばを確かなものとされた」(20)とあります。イエス様の「戒め」に生きる中で、イエスが約束されたことを、ペテロが、パウロが、初代教会が経験して行ったのです。「使徒行伝」をドラマ化した「AD」というドラマにこんな場面があります。イエス様は、会堂司ヤイロの娘を癒される時、「タリタ・クミ―(少女よ…起きなさい)」(マルコ 5:41)と言われました。後にペテロが、ヨッパという町で「タビタ」という女性を癒す時、ペテロはイエス様のことを思いながら「タビタ・クミ、タビタ・クミ」と呼びかけるのです。そうすると「タビタ(ドルカス)」が生き返るのです。そういうことを彼らは経験して行ったのでしょう。

この個所のポイントは、まず「イエスの復活」を伝えようとしたことです。「イエスは死の力を打ち破られた。イエスは今生きておられる」、そう語り、「試練の中にある人々に『主に在って望みに、信仰に生きるように、諦めに捕われないように』と励まそうとした」ということがあります。しかしもう 1 つのポイントは、「不信仰な弟子達に、イエスが宣教の働きを委ねられた」ということです。16 節に「信じない者は…」(16)とありますが、弟子達は「私達は信じている、あなた達は信じていない、だから滅びるのだ」と、そんな高ぶった思いは持てなかったと思います。むしろ「信じない者とは、誰よりも自分達であった」という思いを持って語ったはずなのです。「そんな私も、主の憐れみによって神の恵みを経験する者にされているのだ」、「だから、あなたにも信じる心が与えられる。あ

なたも神の恵みに与れるのだ」、そう語ったはずです。いずれにしても信仰の弱い弟子達は、イエス様の宣教の命令に従うことによって主の働きを、「しるし」を経験し、信じる者になって行ったのです。ある神学者は言います。「信仰は服従の行いによって生まれ、伝道の過程において確かにされる」。

2. 適用～復活の主を信じ主と共に生きるために

この個所の信仰生活への適用は2つあると思います。

1）諦めを生きない

この個所は、弟子達が主の復活を信じようとしなかったことを強調しています。弟子達は、望みを持つことが出来ませんでした。だから心を閉ざして信じなかったのです。それは逆に言うと「信じて生きるとは、希望に生きること、諦めの虜にならない」ということではないでしょうか。「主がおられる、だから主に在って道は開ける」ということを信じることです。神は聖書を通して「あなたが歩む一歩一歩、わたしはあなたの前に道を開く」(詩篇37篇23節)と言われます。それを信じるのです。私達が信じるならば、「信じる者は『しるし』を見る」と主は言われる。私達は、蛇はつかまない。そんなことをする必要はないからです。

しかし、私達もすでに「しるし」を見ています。17節に「新しいことばを語り」(17)とあります。原意は「新しい舌で語る」です。「ヤコブ書」は「人間が最もコントロールが出来ないのが舌だ」と言います。しかし「ヤコブ書」はまた「私達は新しい舌を与えられたのだから、その新しい舌に生きよう」と呼びかけます。時に人を傷つけ、人を不快にするもの、そのような本来「罪の器」である舌で、私達は神を賛美するようになっているのです。主に在って慰めを語り、祝福の言葉を語りかけるようになっているのです。そこに、すでに神の「しるし」が私達にも現れているのです。しかしそれだけではなく、私達がイエスを信じて、神の中に希望を持って生きるなら、人生の様々な場面で神の介入を見せられて行くはずです。

インターネットで読んだ話です。「ある教会の長老(役員)の奥さんが80歳を越えてから教会に来られるようになりました。長老は既に亡くなっていました。ご夫妻には子供がなく、養女に養子を迎えて、その方々が家を継いでいました。養女も、養子の方も教会員でした。長老の奥さんは「死んだら教会で葬式をされることになるから、それなら信仰を持ちたい」と言って教会に来られたそうです。しかし、彼女の祈りは、「寝たきりにならないように」ということでした。なぜなら「寝たきりになれば仲の悪い養女の世話にならなければならない。それだけは金輪際お断り」ということでした。しかし数年後、彼女は脳梗塞で寝たきりになりました。養女の方は、食事から下の世話まで実によくお世話されました。だんだん認知症が進んで行った奥さんは、ある日、養女の方に言われたそうです。「すまないね。私は年をとってボケてしまって、あんたを産んだ時のことを思い出せないんだよ」。神様は、同じ家に住みながら40年も仲良く出来なかった2人に、本当の親子になるという素晴らしい和解を与えて下さったそうです。「しるし」です。

私の話ですが、がカナダで開拓伝道をしようと決めた時、何の見通しもありませんでした。しかし神に望みを置きました。ところが神様は、その私達を知っておられたのです。直ぐに教会会議の伝道委員長を送って下さり、彼が私達の歩む道筋を全部作ってくれました。家庭集会が公教会になって行った歩みを思う時、奇跡を経験させてもらったように、今でも思います。

確かに私達には問題が尽きません。しかし聖書は語ります。「それゆえ、主はあなた方に恵もうと待っておられ、あなた方をあわれもうと立ち上がられる…幸いなことよ。主を待ち望むすべての者は」(イザヤ30:18)。問題の中、悩みの中で諦めに捕われない、御言葉を握りしめ、「しるし」を期待して歩いて行く、それが主と共に生きる在り方だと思います。

2）主の宣教命令を生きる

第2番目に「主の宣教命令を生きること」、それが私達の信仰を確かにする方法だと、この個所は

語ります。なぜそうなのでしょうか。イエス様は「全世界に出て行き、すべての造られた者に、福音を宣べ伝えなさい」(15)と言われました。以前、水曜集会で勉強した「人生を導く 5 つの目的」にはこうあります。「神が最も気に懸けおられるのは、ご自身がお造りになった全ての人々の救いです。神を愛する者は、そのことに関心を持つべきです」(リック・ウォレン)。神が願っておられること、つまり「福音を宣べ伝えなさい」という「主の戒め」に参加して行く時、私達は神様の「同労者」になって行くのです。私達も、一緒に苦労してくれる人を有り難く思い、心を分かち合って行くのではないでしょうか。神様も同じだと思うのです。「私達が神の同労者になって行く時、神のことがもっと分かる、神を経験する、信仰が確かにされて行く」というのは、そこに理由があると思うのです。森繁昇さんも、困難はあったそうですが、「伝える中で信仰が強められて来た」と言いまいた。その意味で私達は、信仰深いから伝道して行くのではないのです。イエス様は不信仰な弟子達を宣教に送り出されたのです。ある意味で私達も、神を経験するために伝道するのです。

「全世界に出て行き…」(15)と言っても、私達が全世界に出て行き、全ての人に福音を伝えるのではありません。私達は、身近な人、手を伸ばすことの出来る人にイエス様を伝えて行けば良いのです。「伝える」と言っても難しく考える必要はないと思います。ある牧師が次のように言っておられます。「現実のうっとうしいあれこれの出来事に足をつっこみながら生きている信仰が『証し』です。苦しいと言ってうめき、悲しいと言って泣き、自分の弱さに何回もつまずきつつ、神によりすがって生きていく、それが私達の信仰生活です…それはしばしばカッコ悪いことです。それで良いのです。どんなにカッコ悪く、つまずこうが叫ぼうが、その人の支えられている土台というものはあらわれてくるのです」(小島誠志)。私達が、本当に神様に信頼と希望を置いて生きて行く時、あるいは神に感謝して生きて行く時、神様のことが証しされるのです。そして示された時には、自分が憐れまれたこと、赦されたこと、助けられたこと、そういう恵みを語る用意が出来ていれば良いのではないでしょうか。昨年、召天された兄弟が、ある方の悩みを見て「教会に来て見ませんか」と声をかけておられたと、葬儀の時に、関係者の方に伺いました。自然体で証しをしておられたのだな、と深く教えられました。

「人生を導く 5 つの目的」は言います。「もしあなたが…与えられている使命に全力を注ぐなら、ほとんど誰も経験したことのないような神の祝福に与ることが出来るのです」(リック・ウォレン)。「神を経験する」というのです。楽しみではありませんか。そして、天国に行った時は、誰かがあなたのところにやって来て「あなたがイエス様を伝えてくれたから、私もここに来ることが出来ました、本当に有難う」と言ってくれて、一緒に喜ぶことが出来たら、私達は自分の人生の軌跡(足跡)にどれだけ満足するでしょうか、私達の喜び(祝福)はどれだけ大きいでしょうか。

まとめます。主は甦られました。今私達と共に生きておられます。それを信じて、諦めに生きるのではない、主に在る希望に生きましょう。そして希望を語って行きましょう。そこに主と生きる生き方があるはずです。